

災害における被災者のスピリチュアルペイン顕在化に関するインタビュー調査
—東日本大震災にて津波被害のあった被災者を対象として—

○ 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

京都大学医学部附属病院 MSW 庵原 美香 (9435)

キーワード：災害、被災者、スピリチュアルペイン

1. 研究目的

2011年3月11日東日本大震災が発災し、戦後の日本が経験をしたこともない多くの死者、行方不明者、環境破壊という未曾有の被害と犠牲をもたらし、日本全体を震撼させた。社会福祉分野においても災害時ソーシャルワークの重要性や理論化が急務とされているが、とりわけ被災者・当事者の言葉や存在を大切にすることは、ソーシャルワーカーにとって最も重要な姿勢である。発災後より被災地においては、被災者の気持ちに寄り添って耳を傾け、スピリチュアルケアを実践する専門家として臨床宗教師が活動をしている。また藤井(2013:4)は、「近年、ソーシャルワーク実践においてクライアントの苦しみとして重要視されているのが、スピリチュアルペインである」と述べており、ソーシャルワーカーにとって当事者である被災者の苦しみを理解しようとすることは支援の前提であり自明であるが、被災者のスピリチュアルペインに焦点を当てるのが災害時ソーシャルワークにおいて重要なアプローチに成り得るだろうかという問いに行き着いた。

よって、本研究では、被災者のスピリチュアルペインとは何かを明らかにし、被災者のスピリチュアルペインに焦点を当てるのが災害時ソーシャルワークにおいてどのようなアプローチの可能性や意義があるのか考察していくことを目的とした。

2. 研究の視点および方法

とりわけ「スピリチュアルペイン」という用語について、あらかじめ定義を行った。「スピリチュアルペイン」をスピリチュアリティが危機的である状態と捉え、「『意味、目的、道徳性、超越、ウェルビーイングの探求や、自分自身・他者・究極的実在との深遠な関係の探究にかかわる特質を指し示すもの』に対する苦しみ(Canda 2010:5)」と定義することとした。その理由は、「スピリチュアリティ」について、Canda(2010:5)は、「人間存在とその文化の普遍的特質を指し示すものとして、すなわち、意味、目的、道徳性、超越、ウェルビーイングの探求や、自分自身・他者・究極的実在との深遠な関係の探究にかかわる特質を指し示すもの」と述べており、大規模災害という突如として多くの人的物的喪失体験、殊に大切にしていた人や物を失う経験をするということは、被災者の生きる活力・ウェルビーイングや、生きる意味・目的を喪失しかねない危機的な状況として、被災者の苦しみに繋がると考えたためである。上記定義を踏まえ、スピリチュアルペインが存在することを確認する方法として、被災者・当事者の言葉・語りの中にスピリチュアルペイン

が表現されるかどうかで確認することとし、「被災者・当事者の言葉・語りに表現されること」＝「顕在化」と定義した。

よって調査方法は、被災地でスピリチュアルペインの顕在化に関する半構造化インタビュー調査であり、下図のように行った。被災者の語り（音声データ）から、スピリチュアルペインの顕在化を調査し、そこから理論を生成する目的で「グラウンデッド・セオリー」を採用した。その際、Flick(1995) *Qualitative Sozialforschung* を参考に、収集した音声データを逐語録に起こし、コード化、カテゴリー化することにより、理論生成を行った。

対象者	選定理由	日程	時間	調査目的	インタビュー項目
東日本大震災で津波被害として家屋全壊を受けた男女。約5名	現実的側面から同郷という関係性で行うことが、対象者も安心して開示できると考え、精神的側面からも安全であると判断した。	2017年8月実施	1人 約1時間	災害時におけるスピリチュアルペインの顕在化を調査する目的。	Canda (393項, 表8-4) による「暗黙のスピリチュアル・アセスメントの質問」を参考に筆者作成。 ※引用文献参照。

3. 倫理的配慮

本調査は、2017年7月に、同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会承認（17035号）を得た。

4. 研究結果

被災者へのインタビューを通して明らかになったのは、次の5つの側面という概念である。【自分自身との関係】、【他者との関係】、【故郷との関係】、【故人との関係】、【社会との関係】という側面において、5人の被災者それぞれにスピリチュアルペインの顕在化を確認したと同時に、その5つの側面にてスピリチュアルペインを抱えやすいことが伺えた。

5. 考察

被災者の方々は、上述の5つの側面において、“why”から“because”のプロセスを繰り返す中で、多面的・多次元構造的意味付けを行いながら日々生活をしてきた。“why”の疑問の中身は、喪失するとは思ってもいない本人にとって大切な価値を見出していた人・住まい・モノ・故郷であった。しかしこの“because”という意味付けは、容易にできることではなく新しい価値の見出し作業であった。このプロセスこそ被災者のスピリチュアルペインであると考えた。そしてその容易ではない意味付けのプロセスを媒介するものが必要であるということも今回の調査から明らかになった。それは地域再生や復興へ向けて被災者と伴走するソーシャルワーカーが、意味付けの媒介者として十分なり得るのではないかということである。これは、災害という局面におけるソーシャルワーク機能の有用性や、被災者のスピリチュアルペインに焦点を当てた災害ソーシャルワークアプローチの重要性を提示することに繋がると考えられた。※引用：Canda, E. & Furman, L. (2010) *Spiritual Diversity in Social Work Practice : The Heart of Helping*, Oxford University Press. (=2014, 木原活信・中川吉晴・藤井美和 監訳 『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か——人間の根源性にもとづく援助の核心』ミネルヴァ書房.) 他引用文献は当日示す。